

## 変わらぬ現実 救世主はいまだ現れず

フォトジャーナリスト  
宇田有三

中米エルサルバドルに入つた昨年三月、リベルター広場前に三年ぶりに立つた。四度目の訪問だ。七年前の停戦時の熱気を思い起こす雰囲気はなく、熱帯のけだるい空気だけが漂っていた。しかし、首都の下町の喧騒に変わりがなかった。紛れ込んでしまえば、方向感覚を失つてしまうほど大きなメルカード（市場）。通りを

歩くにも緊張する治安の悪さ、路上の物売りたち。カメラを向けると明る可笑顔を返してくれる人びと。何もかもがなつかしい。

目についた大きな変化といえば、一九五六年から続いていた大聖堂の修復が終わわり、美しい姿を見せていることくらいだろうか。もう一つ気づいたことといえば、多くいた路上生活の子どもたちの姿が見えないことだ。

あそこだろうと見当をつけ、リベルター広場の裏に行つてみる。廃墟となつた映画館の向かいに子どもたちがたむろしていた。シンナーの入ったビニール袋を手にし

ている子ども多い。

ほんの二週間前まで、タイ・ビルマ国境のカレン族の内戦を取材していた。短い期間にぐるっと地球を半周したことになる。そこで私が感じたことは、内戦のまっただ中に暮らす人々の苦しみと、戦争が終わつてもその後遺症が社会と人に残す傷跡は、似たようなものではないかということだつた。

エルサルバドルの内戦は、富の偏在・社会的不正・民主主義の欠如が原因で起こつた。それに、米・ソの東西対決が拍車をかけた。しかし、冷戦の終結により、時代が動いた。一二年に及ぶ内戦

は国土を疲労させ、民衆を困窮させていた。しかし、そんな状況にも関わらず、政府とFMLN（アラブンド・マルチ民族解放戦線）双方の不信感には簡単にぬぐい去ることはできなかった。

地域機構の努力を引継ぎ、なんとか休戦を実現させた国連は、双方の軍事解除を監視した。さらに、政治的な解決ばかりでなく、土地の分配の問題、旧ゲリラ兵士の社会復帰にまで手を付けた。国連が政府とFMLNの和平交渉に強く・深く関与したのだ。この国の和平合意・停戦は、中米の小国のそれこそ小さな戦争の終結だったかも知れ

ない。だが、国連の平和維持活動（PKO活動）が成功した極めて希な例として記憶されることになる。

今回も、下町近くに宿をとつた。近くにある大学に通うこざつぱりとした服装の大学生の姿が眩しかった。一見、健全な経済復興をしている社会を思わせる。ほんの七年前まで激しい内戦状態だった国の姿とは思えない。めつたに訪れない観光客が現れたとしたら、「この国のどこに問題があつたのか」と不思議に思うかも知れない。「中米の日本」と呼ばれた勤勉な国民性はよみがえつたようだ。しかし、現在のエルサルバドルは自由主義経済を最優先に掲げている。その結果、富裕層だけがますます豊かになり、富

の偏在による貧困層はそのまま、社会的な不正義と不公平は改善されていない。いまだ多くの人が経済的に苦しんでいる。政治的な混乱は収束したが、経済的な格差の広がりには目に見えない形でますます以上に進行しつつある。それは、軍政時代には押さえ込まれていた強盗・窃盗などの一般犯罪の増加であり、都市スラムの拡大である。見えない問題はいたるところでフラストレーションを抱えている。

都市の騒々しさから逃れるべく、地方へ向かつた。首都の東ターミナルを出たバスはパンアメリカンハイウエーを一直線に東へと向かう。途中、北に進路を取り約二時間。ホンジュラス国境が目の前に迫るカパーニヤス州

の州都センソンテペケにたどり着く。そこから大型バスを改造した乗り合いバスでさらに一時間半。懐かしい風景が眼に飛び込んできた。五年前に訪れた避難民の帰還村だ。昨年、ようやく電気が通つたそうだ。

「こんな小さな村にも三年前に警察署ができた。盗みや強盗などの犯罪が急に増えてきたのです。昔は貧しい者が貧しい者を襲つたりするとはなかつたのに」。のんびりとした山奥の村で7年間、根気よく援助活動を続ける米国人ブレンドンさんは、そう私に語つた。ここも、変わったのだ。ピックアップトラック

の荷台に、腹を割かれた馬の死体が積まれていた。手袋とマスク姿の男が二人、その馬を大きな穴の

中に投げ捨てた。地面をおおっていた、数え切れない鳥が一斉に飛び立つた。それと同時に、息が止まるほどのすえたにおいが鼻につく。風が吹くと、砂埃とゴミが吹き上げられ、目を開けておれない。

ここは、首都郊外のネパ市のゴミ捨て場。およそ一〇〇〇人の人びとが、首都が毎日吐き出す、一五〇〇トンのゴミに生活の糧を見いだしている。その光景は、三年前と全く変わっていない。中米一の大きさを誇る近代的なショッピングモール、メトロセントロから車で数十分の距離。繁栄と貧困が隣り合わせの皮肉な場所だ。

ゴミまみれになりながら必死になってゴミの中から食べるものを探し、

懸命に生きようとする子どもたちも多々いた。盗みなどに手を出し、安易な生活術を身につけようと思えばできるはずなのに。そんな彼らの生きる姿勢は、私には美しく映った。

「救世主の国」を意味する「エルサルバドル」を後にする飛行機の中で、そんな子どもたちの姿を何度となく思い出した。精一杯生きている人びとだ。停戦したからといって、何も変わっていないじゃないか。突然、私は憂鬱になった。



「この子の写真を撮っておくれ」。停戦直後、下町の市場で撮影中に声をかけられた。アデリアさん（46歳）の手に乗るアレキサンダー君（サンサルバドル、1992年2月）



8年後のアレキサンダー・フェルナンデス。内気で恥ずかしがり屋の少年に育っていた。後方はお母さんのアデリアさん。（サンサルバドル、1999年3月）



貧しいながらも毎日を懸命に生きる子どもたち。ゴミ捨て場で働く女の子。明るい笑顔で接してくれた。（ネハバ市、1999年3月）



停戦から8年後。いまだ貧富の差は解消されず。段ボールを自分の寝床とする男の子。（サンサルバドル、1999年3月）